

近代地理学の祖
長久保赤水 (1717~1801)

長久保赤水は、江戸時代の地理学者である。高松市忠政の農家に生まれ、学舎を認められて新代学博士吉田玄成(長門)の門下となり、江戸に赴く。地理学・天文学・歴史学等学域の分野にわたる研究業績を残した。2020年3月19日、国は赤水資料750点を歴史資料として重要文化財に指定した。



赤水を育んだ社会情勢

江戸時代の武士は、その地位を保持し上からも学問を学び教養をつむべきものとされ、藩校を設けて主たる学問として儒学を学んだ。また、藩主は自分の教養を高めるために藩学を興えて講義をせよ、塾生たちも塾講をせよ、一考、成程は寺子屋や私塾で学び、赤水も幼少正学塾で儒学を学んだ。第二代水戸藩主の御用代官は、「水戸史」編纂のために史学等にある影響を水戸藩に波及(1663)。その成立を史館員を水戸へ移転させて水戸考館を発見(1697)するなど、学問振興の政策を取った。影響には全国各地から集められた資料が認められ、史館員による研究が進められた。光圀の死後、学問振興の機運は十分に高まりましたが、第三代水戸藩主(赤松)の御用代官の時代に「てまうやく」編纂した。赤松と親交のあった立原道流は新考館の文庫役、子立原道流は新考館館長を務めており、赤松は影響の資料を閲覧する機会に恵まれていた。また、学問、文化の発展が盛んになって進められた時代、赤水は各地の文化と交流し、多くの知識人から豊富な情報を得ることができた。



赤水図 (改正日本輿地路程全図) の変遷を比較しよう！！

ここでは、高松市歴史民俗資料館が所蔵している原因、初版、第2版、第3版、第4版、第5版の6図を掲載して、長久保赤水(1717~1801)の「改正日本輿地路程全図」の変遷を紹介する。江戸時代後期の約100年間のベストセラーであり、吉田松陰や江戸時代の庶民、さらには、伊能忠敬などが見ていた地図である。これらの6枚の地図の細部を比較すると赤水図の様々な変化と発見があることがわかる。

《長久保赤水関係資料693点》
国の重要文化財指定記念



長久保赤水「自画像」
〔長久保赤水関係資料展 高松資料館〕



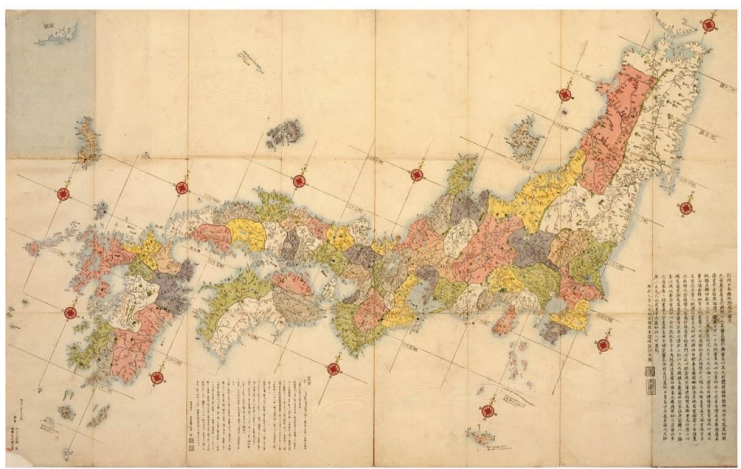
高松駅前に建つ長久保赤水像



長久保赤水「自画像」
〔高松市歴史民俗資料館蔵
〔長久保赤水関係資料展〕〕



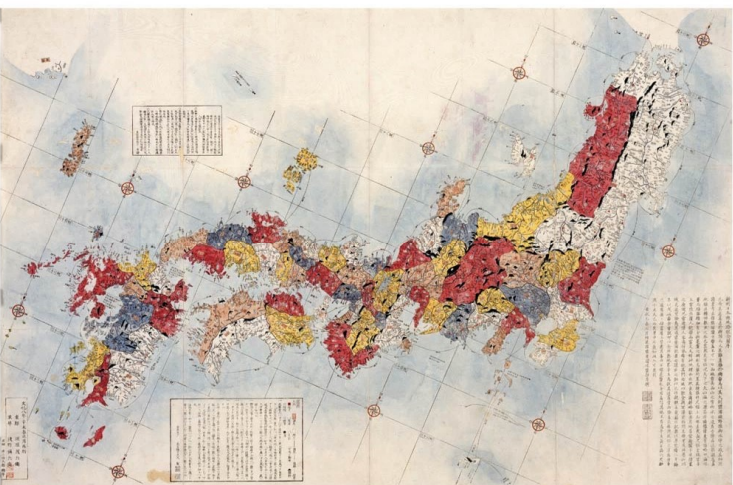
改正日本分里図 長久保赤水手書図 84.6×134.8cm(全) 22.7×19.0cm 明和5年(1768)日本地図の原因 高松市歴史民俗資料館蔵(長久保赤水寄贈資料)
赤水は、赤井村で20年以上の歳月を費して、この「改正日本分里図(赤水図の原因)」を製作した。地形や地名には訛情による多くの修正痕や勘合を何枚も重ねて書きなした跡が残っており、長久保赤水が考証しては、そのつど修正していたことがみとれる。本図には、鹿島灘を藩より「勘合」が貼られており、そこには「改正日本(扶桑)分里図」と記され、明和5年(1768)の年号をもつ。扶桑とは日本の異称である。本図は「改正日本輿地路程全図」の原因と考えられている。しかし、今回の文化庁の調査で、扶桑に付けられた○は消去のしるしであると分かった。今までは、扶桑を強調しているのだからと思っていたので「改正扶桑(日本)分里図」と表記してきたが、今後は「改正日本分里図」と改めて表記することにした。また、この図は「安井春海の所考」として、はじめて緯度を記入した日本図である。奄美群島や琉球諸島は描かれていないが、蝦夷地の南端、対馬、朝鮮半島南東端は描かれ、さらに日本海には竹島と松島が描かれている。



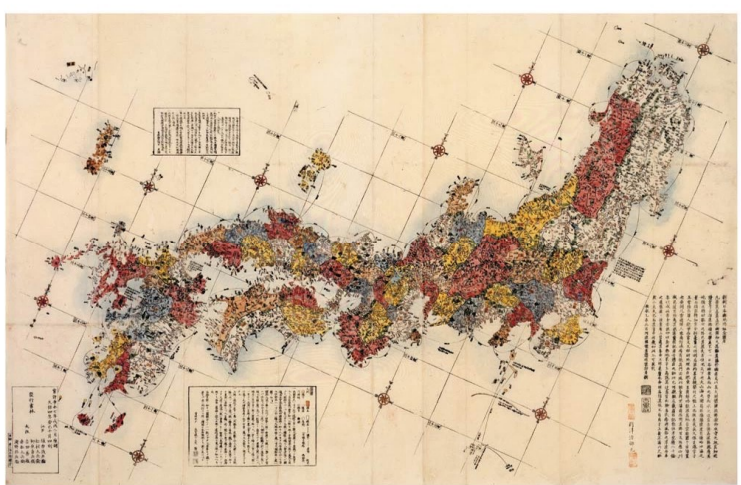
改正日本輿地路程全図 安永8年(1770)初版 81.8×131cm 高松市歴史民俗資料館蔵(長久保赤水願利会寄贈資料)
この「改正日本輿地路程全図」の初版は、安永8年(1779)に完成、翌年の春、大坂で出版された。この図は、10里(約40km)を1寸(約3cm)とする約129万6千分の1の小縮尺の日本図である。それまでの刊行日本図とは異なり、緯線と経線を引いた点で、画期的な刊行日本図である。大坂の書籍売野兵衛より刊行。調成国の権者柴野栗山(1736~1807・寛政の三博士)の序文があり、赤水は栗山と学問的交流があったことがわかる。高松市歴史民俗資料館蔵の安永8年版「改正日本輿地路程全図」は、4点あるが同じ刊行年であっても、何点も赤水が修正を加えていたことがわかる。本図には、右上部の大島・小島が書かれていない。また、下北半島は扇形に描かれており、下北半島をはじめ、古河周辺の河川、半久沼と小貝川、龍林、大和国の奈良・春日、讃岐国の屋島などを比較するとその違いが分かる。4点の中で最も古いものである。さらに、約4,200の地名情報などが掲載されている。



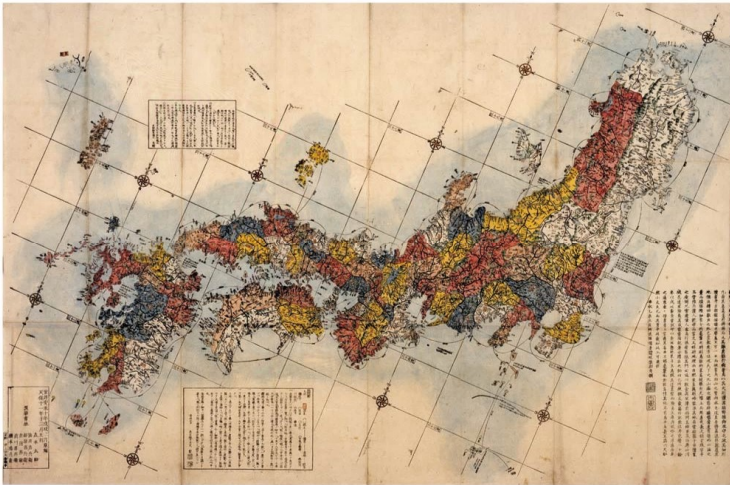
改正日本輿地路程全図 寛政3年(1791)第2版 83×128.5cm(全) 134.5×179cm 高松市歴史民俗資料館蔵(長久保赤水寄贈資料)
次に、赤水図の最大成といえる第2版である。高松市歴史民俗資料館蔵の寛政3年(1791)「改正日本輿地路程全図」の第2版は3点あるが、この図は摹写製作品と思われる。初版図との大きな違いとしては、海路(港から港までの距離)や部分国(郡名の記入)、図の左上の勘合考証部が付加などが挙げられる。また、第2版から四つ書中では、初版にはない「赤井直龍」の書込みが見られる。さらに、地名表記などの情報量も機率的に増加し、国の色分け形も変化した。赤水が存命中に編集したのは、最大成といえるこの第2版図までである。初版とこの第2版を見比べてみると、地名情報なども約6,000と機率的に増加している。同じ赤水図でも初版とは、全の別物であることがわかる。本図では、【是田伊豆七島】となっており、伊豆七島への里数は、まだ、入っていない。赤水図はこれで完成した。第3版以降は、第2版の情報をそのまま使用することで刊行されていた。



改正日本輿地路程全図 文化8年(1811)第3版 85×129.7cm 高松市歴史民俗資料館蔵(横山功兵衛寄贈資料)
赤水没後に出版された地図。この第3版からは、大坂だけでなく、江戸でも販売され、東都：須原屋兵衛、浪華：浅野孫兵衛とある。その後、同じ第3版でも、東都1軒、浪華5軒と次第に販売する書肆(書店)も増え、幕末までのベストセラーとなった地図である。



改正日本輿地路程全図 天保4年(1833)第4版 87×134.6cm 高松市歴史民俗資料館蔵(横山功兵衛寄贈資料)
赤水没後に出版された地図。この天保4年の第4版では、江戸：須原屋兵衛、大坂：松村九兵衛、柳原春兵衛、吉田春雄、赤松九兵衛、浅野孫兵衛とあり、江戸1軒、大坂5軒となっている。



改正日本輿地路程全図 天保11年(1840)第5版 85.7×130.4cm 高松市歴史民俗資料館蔵(横山功兵衛寄贈資料)
赤水没後に出版された地図。この天保11年の第5版では、浪華書肆：森本太助、浅井(マツ)兵衛、柳原春兵衛、吉田春雄、前川春兵衛、橋本徳兵衛とあり、浪華の6軒となっている。